

No. 1078

新宿母子無縁仏

父が、母が、兄弟がいなくなってどれ程になろうか。肉親の行方を探し、相談所にやってくる人は絶えない。身元のわからぬまま死んだ人のリストをたんねんに調べていく。そんな遺体が全国に2300体もあるという。

49年7月20日、坊やを抱いて若い母親が行きずりのマンションから飛び降りた。即死。

遺留品からはどこの誰かも、何ひとつわからなかった。四谷署の係官の懸命な捜査が続けられた。家出人として届けられているのではないか。鑑識課で何万人にもものぼる家出人の届けリストとの照合チェックが行なわれた。しかし見当らなかつた。生前の目げき者を探し出そうと現場を何度も訪れた。あれだけ人通りの多い道路であっても誰ひとり気づいていない。自らの存在の証しを一切棄てて死んだ母と子。覚悟の自殺だと係官は言う。唯一の手がかりは StoK と刻まれた指輪と病院名の記されたチューブ入り薬だけであった。係官は宇都宮の病院に出かけた。手がかりがありますように。せめてその病院に通院したのならカルテでもみつかりますように。祈るような気持で医師と対面した。

“さあ、確かにこの薬はうちで出したものですが……みたことがあるようでないようで、とにかく患者さんの数は多いですからね”

手がかりは何ひとつなく、それでも S.K のイニシャルを頼りにカルテから年相応の女性、男性を選び片っ端から電話をかけた。しかし概当者は見つからなかった。

なぜ子供を抱いて死んだのか。なぜ肉身から家出届けが出ていないのか。どうして死ななければならなかったのか。一切なぞのまま、無縁仏として母と子は葬られた。

身元捜査も行きずまったまま、忘れられようとしていた9月5日、母と子の身元は偶然判明した。

淡い望みを抱いて宇都宮天谷病院にはりだされた母と子の写真を親せきの子供が見たのがきっかけであった。

49年4月25日夫の会社倒産。債権者を逃れ、親子3人家出。

49年5月4日仙台市福祉事務所に妻と子2人だけ保護される。夫は蒸発。妻と子は父親の実家に戻る。

49年7月20日、妻と子は再び家出。その日新宿の某マンションから飛び降り自殺。

命日の49日を明日に迎えた日であった。無縁仏として葬られていた二つの遺骨は父親の腕に抱かれて故郷に向かった。妻と子の心中も知らずどこにいるのか。今なお夫の行方はわからない。